

FOCUS –より良い医療の実現に向かって–

“先義”の精神を貫き、必要とされる医療を提供

医療法人社団健裕会 中谷病院



兵庫県姫路市 医療法人社団健裕会 中谷病院 理事長・院長

中谷 裕司先生

中谷病院は姫路市内でいち早く一般病床から療養型病床群（現・療養病床、以下同）へと移行し、慢性期医療に重点を置いた地域密着型病院として地域医療の一翼を担っています。「不足していた急性期後の患者さんの受け皿こそが地域の中小規模病院の使命ではないかと考え、全60床を療養病床に移行したのです」と理事長・院長の中谷裕司先生は振り返ります。

病院をめぐる環境が大きく変化

中谷病院の創設は1966年にさかのぼります。当時、神戸大学医学部附属病院の第一内科（現・循環器内科）が姫路市に現在の兵庫県立姫路循環器病センターの前身となる施設を新設するにあたり、同科に勤務していた中谷先生のお父様が、このセンターをバックアップするための医療施設を開設するよう依頼されたのが発端だそうです。はじめは無床診療所からスタートし、19床の増床を経て、1980年には88床の病院へと順調に拡大していきました。

その後、病院経営を取り巻く環境は大きく変化していきます。1985年に成立した第一次医療法改正を皮切りに、厚生労働省はこれまでの病床増加に歯止めをかけ、医療供給体制の量的整備から質的整備へと舵を切りました。1992年には病院機能の明確化を図る一環として特定機能病院と療養型病床群が創設され、医療資源を充実させて急性期医療を存続するか、方向転換して慢性期医療に力を入れるか、多くの病院が岐路に立たされました。

当時、神戸大学医学部第一内科に在籍していた中谷先生は派遣医師として中谷病院に勤務しており、お父様のもとで同院の進むべき道を検討しました。はじめは急性期病院として生き残る道を模索しましたが、急性期の施設基準や看護体制のハードルを引き上げられるなどにより、状況は厳しくなる一方でした。

2000年に同院を引き継いだ中谷先生は、「地域に必要な病院になる」との思いから、一般病床から療養病床にシフトし、急性期病院では診ることのできない長期入院患者の受け皿になることを決意します。特に、①呼吸器（レスピレーター）管理、②人工透析、③気管切開の3点に集中して取り組むことをめざしたそうです。「この特徴を明確に打ち出したところ、呼吸器管理や人工透析が必要な患者さんが姫路市内外から訪れるようになり、慢性期病院として軌道に乗ることができました」と中谷先生は話します。



■人工透析室ではスタッフがボタンダウンシャツとチノパンの制服を着用。患者さんとスタッフの垣根を取り払うことでコミュニケーションを活性化させたいとの意図が込められています。

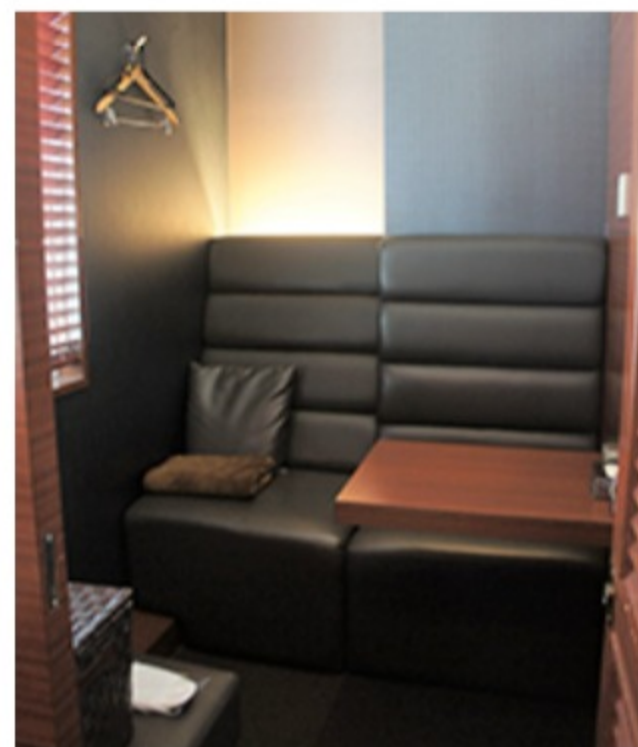
人間ドック待合室の個室化が大反響

その後も中谷病院は独創的な取り組みを展開していきます。健診・人間ドック事業では、待合室の個室化を手掛けて大きな反響を呼びました。「以前はテレビのある部屋で4～5名の利用者が待機するという環境でしたが、プライバシーの面などから良い環境と思えなかったので、個室化に踏み切りました。ご利用いただいた方に大変好評でリピート率は8割に上ります」。個室化にあたっては院内で対策チームを立ち上げ、各メンバーが当時よく流行っていた施設や一流ホテルの人間ドックを視察するなど丁寧に検討を重ねたそうです。

また、2016年には院内にトレーニングルームを設置し、糖尿病や脂質異常症、高血圧の患者さんを対象に保険診療で運動療法と食事指導を行う“生活習慣病改善プロジェクト”を始めました。「市内で会員制ダイエットクラブを運営している高校時代の後輩に共同事業の話を持ち掛けられたのがきっかけです。まず自分でダイエットクラブの運動療法を試してみたところ、予想以上の効果が得られました。生活習慣病管理料が算定できるのは分かっていたので、院内でこの運動療法を実施できないかと考えたのです」。

同プロジェクトは、ダイエットクラブから派遣された健康運動指導士が対象となる患者さんに対し無理のない運動プログラムに沿って指導し、また同院の医師、看護師、薬剤師、管理栄養士が同プログラムをバックアップし生活習慣病の改善を支援するというもので、現在100名ほどの患者さんが利用しています。「肥満は全ての生活習慣病の根っこです。運動療法や食事指導で少しでも改善していければと思っています」。実際にデータ解析したところ、週1回の運動療法と食事指導を3カ月間継続した結果、生活習慣病の患者さんの体重・内臓脂肪は有意に減少し、また意識の高い未病者に同様の介入を行ったところ、体重・内臓脂肪に加え血液検査値の改善も認められたそうです。

「何をするにしても大切なのは世の中の役に立っていると自負できること。それがわれわれのモチベーションにもつながります。今後は、地域ぐるみで高齢者の運動をルーチン化する仕組みをつくり、健康増進や介護予防に寄与したいですね」と中谷先生は今後の展望を語ります。病院を引き継いだ当初、中谷先生は医療制度や経営について徹底的に勉強したそうです。特に大丸創業者が唱えた社是「先義後利」（利益はお客様や社会への義を貫き、信頼を得ることでもたらされるとの意味）には強く共感し、同院の理念も“仁以先義成（仁を以て先義を成す）”と決めました。人を思いやる気持ちを持ち、社会のために良いことを率先して実行する一この精神は同院の全ての取り組みの源泉になっているようです。



■人間ドック利用者の待合室。洗練された個室には液晶テレビやWi-Fi環境が完備されています。共用スペースにはドリンクサービスや雑誌が充実しており、リラックスした雰囲気の中で過ごせるよう配慮されています。



■同院の運営を支える理事会メンバーです。左から副院長兼診療・薬剤部長の志水栄伸先生、副院長兼看護・介護部長の中谷悦子氏、中谷裕司先生、副院長兼事務局長の播間利光氏。

(2021年7月取材)

関連ページ

・